



マスター ↑↓to アーティスト



【第5回】

<デザイン嫌い>

駒井 貞治

デザイン学部 講師



- 1968年 (昭和43年) 大阪府生まれ
- 1990年 京都府立大学住居学科卒業
- 1990~95年 建築環境研究所
- 1996年 駒井貞治の事務所開設
- 1998年 「借家生活」第17回SDレビュー入選
- 1999年 「今月の吉村家」第18回SDレビュー入選
- 2001年~ 京都造形芸術大学ほか非常勤講師
- 1999年 「今月の吉村家」
- 2000年 「浮遊代理店」
- 2001年 「建売/完建住宅01」池田邸
- 2002年 「借家生活、3」

研究室の中には、桧の角材がたてよこに組まれている。角材は、個人のデスクと打合せのできる大きなテーブルをパーティションで隔て、部屋の壁面に巡らされたものは棚となっている。木の香りで満たされ、外から見える以上に居心地がいい。スペースは有効に活かされていて、デスクは区切られた枠の中、その上部は物置となる。デスク周辺の適度な圧迫感と密度感は、そこがパーソナルなスペースであることを自然と主張し、なおかつ、何故か子供の頃に憧れた「秘密基地」のようなワクワクとする感情を呼び起こさせる。しかし、この無骨な角材、一般的な「建築」や「デザイン」といった言葉から触発されるイメージからは程遠い。



「デザインという言葉が嫌いでした。大学卒業後、吉村篤一／建築環境研究所に勤務、建築家として順調なキャリアをスタートさせた。しかし、半年もすると心の中に迷いが生じた。家を建てたいという妹夫婦が自分のものへは依頼に来なかった。「お兄ちゃんが行ってる事務所は、一部選ばれた人のための家でしょ。高いし、こだわりがすごくある人じゃないと頼めない」。高校からの友人も同じことを言った。「敷居が高い」。

二人の言葉はあまりにも重かった。友達や兄妹に頼まれないようなことをやっていることに疑問は膨らみ続けた。庶民のための物じゃない建物、そしてデザイン。「入って1年くらいは、自分で言うのもなんですが、いいものを作っていましたよ。作ると必ず雑誌に載るんです。でも、自分はデザインの手前にあるものをもって大切にしたいと。大学に入る前から興味があったことでしたし…。5年間勤めたところで設計事務所を辞めてしまう。そして、建築の世界から離れようと決意したという。

仕事から離れると、自分の興味のあること、やりたいことが明白になった。自分が高校生だった頃、勉強を



「借家生活3」

倉庫の中に角材でフレームを組み、自宅兼事務所に。道路に面したギャラリー、その隣には事務スペース、上段は子供たちのスペースとなっている。
 『新しい住まいの設計』掲載 垂見孔士 撮影



『ワールドフォト
 プレス MEMO』
 掲載 高原秀 撮影



「池田邸」

建築条件付き宅地の物件を購入した妹夫婦の家。建築条件付きとは、指定の建築業者と契約する条件が含まれる宅地のことで、通常、設計の自由度はかなり少ない。施工の条件を満たした上で、使いやすい快適な住宅を実現した。
 『TOTO通信』掲載 傍島利浩 撮影

前写真 a :
 西キャンパス中庭に学生と建設したツリーハウス

教えてくれた塾の先生のことを想い出した。勉強嫌いで成績も芳しいものでなかった自分に、いろいろな勉強方を見せてくれた。そして自分に合った方法を見つけることができた。勉強が嫌いじゃなくなると同時に、勉強のやり方を考えることが楽しくなった。駒井少年には、そのやり方がマジックのように魅力的に映った。その記憶もあって、自分も同じように誰かのため方法を探る役割を果たしたいと考えた。「やりたいのは、人に合わせてやり方を考える喜び、いい点を取ったりするのはおまけで、そのプロセスを味わえる仕事だったんです」。そんなことを胸に職を探した。塾の講師、出版関連…、しかし採用される筈もなかった。その分野に何

の実績も持たない者が、気持ちだけで職を与えられるほど甘くはなかった。そして、そんなことをしているうちに、はたと気が付く。「建築でいえば、施主がいてそれにピッタリの箱を作る。それで100点。箱につられて中身が変わっていくようなことになれば120点の住宅ができる。あれっ、ちょっと待てよ(笑)、俺のやりたいことは全部入っているじゃないか！」

飛び出した設計事務所の師に謝った。自分の未熟さを悟った。その上で、自分の考えに基づき、新たに自身の事務所を開いた。一握りの人のためではない、必要とする人全てのための設計。建築家としての出直しは、強い信念に裏打ちされたものとなった。

そして以降発表する作品は、強固なオリジナリティと利便性を併せ持ち、その都度、注目を浴びることとなる。そして何より、その建物のユーザーの満足度が高いものになっていった。どの作品からも、そこへ住まう人の生き活きとした表情や生活が、容易に浮かんでくる。

「かっこうの悪いものは作らないけど、デザインが主ではないんですよ」。柔和な関西訛りでこともなげに発せられる言葉。設計事務所に勤め、デザイン恐怖症になるまで、文字通り、寝ないでデザインを考えていた時代を経て、たどり着いた。あまりにも重い言葉だ。カタチよりも優先するもの、デザインというものの本質がそこにはある。